

# 連載コラム



## 第 79 回

### 源氏物語の植物たち (5)



もとよし ふさお  
本吉 総男

2025 年 2 月



地面が見えず、蓬よもぎのきは軒むぐらを超えるほどに生え登り、葎むぐらは東西の門を覆って人の出入りができないほど生い茂って、用心には役立つほどですが、崩れかかっている垣根は牧童が放牧している牛馬に踏み荒らされています。

この邸の家づくりを好み、木立にも関心を寄せる受領ずりやう(国司の長官)どもが、ここを売ってくれと要求しますが、末摘花すえつむはなは親が残してくれた屋敷を手放す気は毛頭ありません。たまに訪ねてくる兄ぜんじの禅師すえつむはな(徳の高い僧侶)は、末摘花の荒れた庭園などには無関心で、修復するなど考えるような人ではありません。

末摘花すえつむはなには叔母すえつむはながいます。母の妹で、落ちぶれて受領ずりやうの妻となり、姉である末摘花すえつむはなの母にさげすまれていると思っています。その恨みもあって、末摘花すえつむはなを召使いにしてやろうと企んでいます。叔母は夫が太宰だいにの大貳すえつむはな(国司の長官)となり、妻を伴って任地の筑前に行くことになったので、末摘花すえつむはなにいろいろ甘言すえつむはなを使って連れて行こうとしましたが頑として断られます。叔母は、それなら末摘花すえつむはなに仕えていた侍従を代わりに連れて行くといい、最も頼りにしていた侍従は叔母すえつむはなについて行かざるを得なくなりました。この侍従は末摘花すえつむはなの乳母の娘で、かなりの美人です。

末摘花すえつむはなの憂うさを今まで紛らわしてくれていた侍従が叔母に連れ去られてしまい、孤独に生きるほかありません。霜月(陰暦11月、陽暦12月頃)になると、雪が深く積もり、出入りする人もなく、寂しさ、物悲しさに耐えていかねばなりません。一方、源氏は帰京後、二条院むらさきのうへ(紫上むらさきのうへが住む邸宅)でのさわぎで、特に身分の高い方々以外の人たちが、どうしているかと気にかけていますが、すぐには訪ねて行くことはありませんでした。

年もかわり、卯月むらさきのうへ(陰暦4月、新暦では5月頃)、源氏は紫上むらさきのうへに外出の了解を得て、雨あがりはなちるさとに月が差しいでる夕刻あてに花散里あてを訪問しようと、惟光あてを連れて出かけます。艶やかな夕月夜が映えて、このあたりを思い出しつつ行くと、森のように木立ちが繁る荒れ果てた家を通りかかり、大きな松にかかる藤の花から風に乗ってくる香りが懐かしく感じられます。柳が乱れるように枝垂しだれているのも目につきます。ここが故常陸宮邸であることに源氏は気付きます。そして源氏は惟光すえつむはなに、末摘花すえつむはながいるかどうかを探させます。惟光は、まず会った老女の一人に何者かと疑われますが、源氏が来ていることを伝え、老女も納得したので、戻って源氏に状況を伝えます。

惟光よもぎは蓬つゆの露すえつむはなを払いながら、末摘花すえつむはな邸に源氏を案内し、寝殿に入れます。まさかと思いなすえつむはながらも一途に待ちに待った源氏の来訪に、末摘花すえつむはなは嬉しいけれど恥ずかしげな有様で、この

人の慎ましい心が表現されています。源氏は、「あなたが一途に私を待っているとも知らずにいたのは、私の怠りです。私が昔言った言葉に背いていたことで、私は罪を負うべきです」と口ほどでもなく告げると、末摘花は情け深い言葉と受けとめます。軒端もほとんど無くなっているのに、邸に月が鮮やかに差し込んできます。

平安時代に貴族たちが愛でた月の世界は、「竹取物語」に見られるように、天人の住むような美しいところとイメージしていたのではないかと思います。でも現代は人が月面に降り立ったり、探査機が月の表面を映し出すなどによって、平安時代の人の月に対するイメージとはずいぶん違ってしまいました。



わが家の窓から

2023年2月5日17時11分撮影

「蓬生」に戻ります。源氏は召使などに命じて、末摘花邸の庭の蓬を払わせ、周囲の見苦しさをかくすため、板垣でしっかり囲わせます。末摘花の窮乏に去って行ったものたちは、末摘花が源氏の庇護を受けるようになったことを聞きつけて、我も我もと戻ってきます。末摘花は2年ほどこの邸に住んでいましたが、源氏はその後二条院近くの東の院というところに移らせます。源氏は対面することは難しくとも、その辺りを通る時には、さし覗くなどしておろそかに扱うようなことはしません。

「末摘花」の巻のあらましは、[第76回「源氏物語の植物たち\(2\)」](#)で述べましたが、そこでは末摘花の容貌の醜さが強調されています。しかし、「蓬生」では、どんな誘惑にも負けず、唯一頼りにしていた侍従さえも叔母が連れ去ってしまい、それでも故常陸宮邸でひたすら源氏の来訪を待ち続けるという源氏への愛が強調されており、再会した源氏の優しさも感動的です。

「例の叔母は大貳と共に京に戻り、末摘花の幸運に驚き、また叔母が連れて行った侍従は心の浅さを恥じるなど、語るべきことも多いのですが、私(紫式部)は頭痛がして、気が進みませんので、また思い出す折があればお伝えしましょう」と「蓬生」の物語を結んでいます。

この巻には、蓬、浅茅、葎、柳という4つの植物名が出ています。

## ヨモギ

ヨモギは本州、四国、九州、朝鮮半島に分布するごく普通の多年草で、地下茎で増えます。  
すえつむはな  
 末摘花の庭園のような荒地に入り込んだら、始末に負えないほど増えるかもしれません。現在でもヨモギは野外ではよく見かけますが、現代の庭園には入り込むような植物ではないように思われます。今では外来種の雑草が在来種であるヨモギと競合して圧倒し、ヨモギは野原に適所をみつけて生き残っているように思われます。



春のヨモギ 3月下旬 みずき野第2調整池



ヨモギの花 10月中旬 みずき野第2調整池

今はヨモギに替わって、ヒメムカシヨモギのような外来雑草がよく庭に入り込みます、ヒメムカシヨモギは北米原産の一年草または越年草なので、ヨモギのように地下茎を張って、びっしりと地面を覆うことなく、ある程度距離をおいて生えますが、庭では最も目立つ雑草です。



ヒメムカシヨモギ(現代の庭雑草の代表種)  
 8月上旬 みずき野本町地区



真冬でも庭に生えるヒメムカシヨモギ  
 12月下旬 わが家の庭

## チガヤ

<sup>あさじ</sup>浅茅とは広辞苑によれば「まばらに生えたチガヤ。また、丈の低いチガヤ」とあります。でも、みずき野第2調整池に生えているチガヤは、密集し丈も高く、「<sup>あさじ</sup>浅茅」という感じとは異なりますが、写真を載せておきます。分布は北海道、本州、四国、九州、アジア、アフリカ。野原や土手などに普通に見られる多年草でツバナとも呼ばれています。



チガヤ 5月上旬 みずき野第2調整池

## ムグラ

<sup>むぐら</sup>葎は、広辞苑によれば「<sup>やえむぐら</sup>八重葎など、荒地や野原に繁る雑草の総称」とあり、旺文社古語辞典には「つる草の総称。荒れはてた家や貧しい家の描写に用いる」とあります。「<sup>よもぎふ</sup>蓬生」の中で考えられるムグラには、カナムグラ、ヤエムグラ、ヤブガラシがあります。

カナムグラはつる性の一年草で、雌雄異株。茎には下向き<sup>とげ</sup>の小さな棘が生えていて、高さは2メートル前後に生長し、絡み合って増えます。北海道、本州、四国、九州、沖縄、台湾、中国に分布します。ビールに苦味を与えるホップと近縁です。「<sup>よもぎふ</sup>蓬生」での葎<sup>むぐら</sup>に最も当てはまる植物です。



カナムグラの葉 8月上旬 守谷市本町地区



カナムグラの雄花 10月中旬 守谷市本町地区



カナムグラの雌花 10月中旬 守谷市本町地区



カナムグラの果実 10月下旬 守谷市本町地区

ヤエムグラはごく普通の一年草または越年草でつる草ではないのですが、茎に下向きの棘とげが生えていて、互いに絡み合い、90センチほどに生長します、北海道、本州、四国、九州、沖縄のほか、中国、ヨーロッパ、アフリカに分布しています。



ヤエムグラ 8月上旬 守谷市本町地区

ヤブガラシもムグラの中に入れてもいいでしょう。多年性のつる植物で、地下茎で増えるので群生します。藪や小木を覆うように生長し、ヤブガラシに覆われた藪や木は枯れてしまうことがあります。北海道、本州、四国、沖縄や東アジアに分布する植物です。



ヤブガラシ 8月上旬 守谷市本町地区

## シダレヤナギ

「蓬生よもぎふ」の中に、庭園の荒れたる様の表現のひとつに「柳もいたうしだりて、築地にもさはらついちねば、亂れふみだしたり」という文があります。ちょうど築地ついちが崩れている所に柳が乱れて枝垂れしだ

ていると思われます。シダレヤナギは中国原産の落葉高木で、奈良時代の日本に入り、古くから栽培されていたようです。



シダレヤナギ 4月上旬 守谷市城址公園



シダレヤナギ 4月上旬 守谷市四季の里公園

## 「せきや關屋」のあらすじ

うつせみ 空蟬の夫である伊予介は、いよのすけ 源氏の父(前帝・院)が亡くなった翌年、ひたちのすけ 常陸介となつて空蟬とともに幾年月か常陸の国にいましたが、帰郷することになりました。源氏29歳の秋のこと、ひたちのすけ 常陸介が逢坂 あふさかのせき 関に向かう途中、迎えの人々から、源氏が願を果たすため石山詣(近江国石山寺に参詣すること)をすると聞き、車で混雑すると予想し、未明に出立したものの、すでにたくさんの女車が道を塞いでいて、せきやま 關山(逢坂のこと)に着いた頃は日盛りになっていました。源氏一行が通るのをやり過ごすため、一同はここかしこに林立する杉の下に車をおき、牛を解き、木隠れにかしこまっていた。

源氏は関でとまり、えものすけ 衛門佐(空蟬の弟。「空蟬」の巻では小君といい、源氏に懐いていた)を呼び、「今日のお関迎え(京に入る人を逢坂関で出迎えること)には空蟬も思い捨てはしないでしよう」と言います。心の中での思いを僅かに伝えることしかできないのを口惜しく思います。空蟬も往時を思い出し感慨深く、源氏を思う気持ちを心の中で歌に詠みますが源氏には伝わりようもありません。

京に戻ってからは、ひたちのすけ 常陸介は歳のせいで、病がちになり、我が子たちの行く末など心配事を抱えつつ、ついに亡くなってしまいます。空蟬は河内守から懸想(恋い慕うこと)を受けたのですが、お世辞と思えて、浅ましい心がありありと見えるので、この人物からのがれるため、誰にも知らせることなく尼になりました。



## スギ

「<sup>せきや</sup>關屋」の中には、<sup>あふさかのせき</sup>逢坂関にスギが林立していたという記述があります。スギは常緑高木で本州、四国、九州に野生のスギが見られるようですが、主として杉材として使うために植林されています。「<sup>せきや</sup>關屋」での、<sup>うつせみ</sup>源氏と<sup>ながつきつごもり</sup>空蟬の会合は、<sup>つごもり</sup>九月晦日（長月は新暦のほぼ10月にあたり、晦日は旧暦の月末）ですが、残念ながら、この時期のスギの写真を撮っていませんでした。私の写真は、花粉症の季節のものです。



スギ 2月下旬 守谷市北園森林公園



スギの雄花 2月上旬 守谷市北園森林公園 スギの雌花(中央) 3月中旬守谷市北園森林公園



スギの雄花のつばみ



スギの実(球果)



スギの種子

いずれも 12月下旬 守谷市北園森林公園

ところで、<sup>あふさかのせき</sup>「逢坂関」跡は現在どのようになっているでしょうか。[「びわ湖大津歴史百科—逢坂山関跡」](#)などが参考になります。